

## T. S. Eliot とキリスト教 (3) — 死と復活について —

T. S. Eliot and Christianity (3) :  
Death and Resurrection in “East Coker” and “Little Gidding”

(1993年4月7日受理)

橋内幸子  
Sachiko Hashiuchi

Key words: T. S. Eliot, 死, 復活

### I. キリスト教における死と復活

キリスト教の教義において、死と復活は中心的テーマである<sup>1)</sup>。人間は限りある現世での時間を過ごす間、死の不安を抱えて生きていく。宗教への帰依は、この死の超克を教えてくれるがためにおきるともいえるであろう。ギリシヤ思想では、プラトンなどが靈魂不滅論をとえ、たとえ人間の肉体が滅んでもその靈魂は不滅であるとした。一方、ヘブル・キリスト教思想では、死の際に魂が肉体から離れるという概念は異質のものである。旧約聖書においては、死は神から人間にあらかじめ決められた一定期間の生命力の持続の終結とされる。「あなたは塵であり、塵に返るからである」(創世記3・19)。人類の祖アダムは、エデンの園で永遠に生きる可能性をもっていたが、神の命令に背いて知恵の木の実を食べ、楽園を追放された時に不死もなくなったのである(創世記3・22-23)。死者は死の国ではかない生活を送り、新約で説かれている復活の機会と永遠の生命への希望はない。

新約聖書の死についての教説にも、人間として避け得ない運命、不信仰と罪の結果としてもたらされるもの、孤独と恐怖の経験などの否定的な側面が引き続き込められてはいるが、救い主キリストの介在により、新しい展開を示している。もっとも、新しく出てくるものは必ずその前の伝統をも抱えて伝播していくものである。この場合も、旧約聖書やユダヤ教の信仰も無視できない。つまり、ユダヤ教も時代の変化の影響をうけて、パリサイ派の律法学者たちには復活を信じる態度が見え始め、ついにはそれに期待を寄せるようになっていったのである。イエスも死を前にして、苦悩し嘆いた。自分自身の死を予期したとき、神と弟子をはじめとする人間たちから見捨てられることの恐怖と孤独に直面した。彼は死の瞬間に、神から見放されたとき、嘆かざるをえなかったのである(マルコ15・34)。しかしイエスはこの世にあるとき、死者を甦らせ(マタイ9・18-26)、自分自身の死後における復活をも予言した(マルコ8・31;9・31;10・34)。従って、パウロの解釈が後に示すように、イエス・キリストは我々の罪のために死にたもうたが(Ⅱコリント5・21)、我々人間の義認のためによみがえらせられたもうた(ロマ書4・25)。キリスト者は、その信仰により、救い主キリストの死と復活にならい、永遠の生命に与かる機会を得ることができるようになったのである。

新約聖書は死の靈的側面を強調しているがために、復活の意義もまた重要である。旧約諸文献には、

死者の復活についての記述は個人の復活についてではなく、民族の再興を比喩的表現で示したもの（エゼキエル書37）、死後の生命には無関係な単なる肉体の復活や靈魂の不滅性を述べたもの（ダニエル書12・2-3）などがある。しかし、その内容は単発的であり、信仰の基礎となるようなものではない。一方、原始キリスト教は、イエスの復活という信仰を最大のよりどころとして成立した。イエスは刑死の前に自らの復活と死後の生命について語り（マタイ16・21;17・22-23;20・17-19）、空の墓の発見（ルカ24・12）、弟子たちによるイエスの甦りの宣言（使徒行伝4・10）といった一連の出来事により、「神の御子」（ロマ書1・14）として、認知された。これにより、イエスは「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者はたとえ死んでも生きる」（ヨハネ11・25）という啓示を確固として示すことが可能となった。人間は、社会の中にあっては正義と平和、個人としてはパプテスマと信仰により死後も永遠の生命に移行することができる。

終末論は、以上のような救済の究極的発想に基づく思想である。天変地異や戦争、疫病の流行による大量死などが発生すると世の終わりという絶望感が漂い始める。次に、この思想が民族の興亡と関連すると、その民族を救うメシアを待ち望むことになる。そして、個人の罪の意識、贖罪、死の不安、魂の救いといった宗教的色彩を帯びると、個人としての靈魂を救うメシア待望、死者の復活、最後の審判、永遠の生命への希望を含むものとなっていく。ヨハネ黙示録の第20章には、この世の終わりの前にキリストが現れて、千年間もの間、世界を支配するという千年至福説が述べられている。いったん肉体が減んだ人間も、最後の審判のときに最終的な決定として、永遠の生命を得る者と得られない者とに分けられて、それぞれの運命に従うのである。

## II. *Four Quartets* について

文学における死と復活は、宗教の場合と同様、肉体と精神（あるいは魂）の両方のレベルにおいて必ず出てくるモチーフであり、テーマである。小説、詩、劇などの、人間の真実を扱う表現様式において、限りある人生の時を生きる人間がいかにかに生き、いかにかに死んでいくのかを描き、思いを巡らせ、虚構の世界であってもそれぞれの生を生きていく人物像に共感し、作者のメッセージを心に刻み、翻って、現実の人間に理解を深めるといったモラリスト的読み方を提供できる最高の枠組ともいえる。テーマとしての死と復活を、人物像の中に最も効果的に織り込めるのはもちろん小説と劇であるが、イメージの表出を第一義とする現代詩に使われると、言葉及び言葉の組み合わせから生じる恐ろしいまでの喚起力を実感できるものでもある。

T. S. Eliot の後期の詩の傑作である *Four Quartets* にも、他のテーマとともにキリスト教的な意味での死と復活が繰り返し提示されている。この作品は、もともと四つの独立した詩を集めて一つのタイトルのもとにまとめたモザイク的形態が持つ拡散と収斂の方向性を秘めている。その意味において、初期の代表作 *The Waste Land* と同じく、重層的なイメージラリーに加えて、異なるコンテクストに組み込まれたテーマの繰り返しがあつた新鮮な局面が、さまざまリズムに合わせて展開されている。また、それぞれの詩が発表された年も、“Burnt Norton” が1935年、“East Coker” が1940年、“The Dry Salvages” が1941年、そして“Little Gidding” が1942年であり、Eliot が50才前後、時代はちょうど第二次世界大戦が始まる前と大戦中であったことは、やはりこの詩のトーンを決定する一つの要素であったといえるだろう。若年より取り組んだ詩の技法と言葉への実りある成果として、集大成を意味する作品であった

といえるが、戦争という極限状況がより詩人の感受性を人間の生死への省察に向けたことは確かである。結局、これらがまとめられて再編成の形をとって *Four Quartets* として発表されたのは1944年のことであった。本稿の目的は、この作品の中から“East Coker”と“Little Gidding”の二篇を選んで、キリスト教的な意味での死と復活のテーマをたどることにある。

しかし、論を進める前に作品全体の包括的な特徴を確認しておかねばならない。まず、それぞれの詩篇が独自の詩的世界を構築してはいるものの、*Four Quartets* には一貫して見られる共通の特徴が挙げられる。そのいずれもが死と復活に関連している。まず、全体として見た *Four Quartets* は「時」に関する瞑想詩である。最初の“Burnt Norton”の冒頭では、時間の三つの相である過去、現在、未来についての認識方法を取りあげている。

Time present and time past  
Are both perhaps present in time future,  
And time future contained in time past.<sup>(2)</sup>

人間の意識において、過去は記憶と回想の形で現在と関連し、未来へは予測と展望を通じて現在とつながっているから、「時」は我々の意識の中で、過去、現在、未来という枠を超えて、一つの連続体の形態をもつ。また、ヨーロッパ人は中世の時代から、時間や時代を生と死、つまり生まれ死んでいくものとしてイメージしていた。時間を時の流れとして把握する日本人とは異なり、ヨーロッパ人にとって時とは有限のものであり、従って始まりと終わりがあること、自他の時間は完全に異なることなどの感覚があるために、より厳しい孤独感と強い意志をもって生き抜く覚悟をせねばならない。脱落者とはこの意識が持てない人間のことである。孤独地獄と絶望の中でしか悟れない隣人愛は、精神的復活への契機を意味する。

次に、様々な対立概念の調和、言い換えれば、相反するものは同じものの二面にすぎないという解釈から引き出される神秘主義的な一体感が、どの詩篇にも感得されることである。始めと終わり、過去と未来、闇と光、生と死、動と静、一と多、小宇宙と大宇宙などについての対立概念は、人間の意識の中で「愛」と「超脱」のフィルターを通すことにより、「対立の図式」から変貌した別の「新しい図式」(‘renewed, transfigured, in another pattern.’)になる。14世紀イギリスの神秘家 Lady Juliana of Norwich の言葉、‘Sin is Behovely, but/All shall be well, and/All manner of thing shall be well.’ という啓示が示され、罪や敗者、とりわけ敗れて死んだ者達も、生きている者に残す「象徴」故に存在した意義があったとされる。その象徴が示すものは、神の「愛」と、死んで初めて善悪を超えて輪郭が見えてくる「人間とは何か」を体現した生涯から導かれる逆説的な悟りである。

なお、*Four Quartets* も *The Waste Land* と同様、各詩篇が5楽章ともいべき5つの部分から構成されている。音楽用語をタイトルに使ったのも、テーマとリズムの繰り返しが音楽の様式をおもわすものがあるからである。Iは、どの詩も50行程度で、主に「時間」が人間や自然に対して及ぼす影響や消えゆく瞬間の中に時間を超えた永遠のヴィジョンを実感する様子が無韻詩の形式で描かれる。IIでは、始めに情緒的な抒情詩の形で、自然や宇宙の調和や混乱がそれぞれの内容に合わせて述べられ、次のパートに連動していく。IIIは、Iと同様無韻詩で、現代の荒廃を批判したり、人生を旅にたとえて教訓を与えたり、生と死を考察したりする。“Burnt Norton”以外には、それぞれ中世・近世ヨーロッパの神秘主

義者達の主義・主張が、ここではめこまれている。Ⅳは、主として定型の抒情詩の形式をとる。その内容は、自然の中に恩寵を認識したり、キリストの受難を述べたり、全体が祈りの言葉であったり、霊的再生への決意であったりする。Ⅴは、口語調で始まり、次第に簡潔で力強いが、抒情的な瞑想詩の表現でフィナーレを迎える。テーマは時間、生、死、及びあらゆる矛盾の解決である。

### Ⅲ. “East Coker”

Somerset 州 East Coker——。Eliot の祖先の一人である Andrew Eliot が1667年、イギリスからアメリカは Massachusetts 州 Salem に移住するまで、Eliot 家の人々が代々住んでいた小さな村の名前である<sup>1)</sup>。Eliot 自身も1937年8月にこの村を訪れ、自分の家系やはるか昔の人々の暮らしに思いを馳せた。村には古い小さな教会があり、周囲には yew tree が生い茂り、長い年月のために埋葬されている人の名前も消えている墓石もある。Eliot はこの静謐なたたずまいが気に入って、晩年まで以後何回か、この地を訪れた。そして、後年、彼の遺言により、この教会の後部の片隅の壁の中に、Eliot の遺灰の一部が納められ、その上に記念のプレートがかかっている。そのプレートの上部には、“East Coker”の冒頭の言葉、‘In my beginning is my end’（わが初めこそ わが終わり）、また下部には締めくくりの言葉、‘In my end is my beginning’（わが終わりこそ わが初め）が刻まれている。

*Four Quartets* の各詩篇には、四大元素が一つずつ、代表的なシンボルとして割り当てられている。“Burnt Norton”には風，“East Coker”では土，“The Dry Salvages”においては水、そして“Little Gidding”では火が主要な象徴機能を果たしている。16世紀のスコットランドの女王、Mary Stuart が座右銘にしていた ‘En ma fin est mon commencement’ をパロディー化した表現で始まる“East Coker”では、土の上にあるものの栄枯盛衰の例が続く。家々は建ち、倒れ、壊され、建て直される。または、広い野になったり、使われた木材は新しい火へ、灰へ、そして土になる。土は動植物の養いであり、命を終えた個体の埋葬される所である。あらゆる物には、いわゆる「消滅」はなく、それぞれの「時期」(a time)があるにすぎないとされる。「家々は生き また死ぬ」(Houses live and die)が、「建てるにも、生きるにも、産むにも、破壊のためにも」時がある (there is a time for building /And a time for living and for generation /And a time …to break)。この個所には、「全ての物には時期がある」とする、旧約聖書の伝道の書の三章一節への連想がある。

次の一節において、詩人は祖先の地を訪れ、初秋の残暑が厳しい中を、陰の濃い田舎道をたどる。彼が村の広い野で幻視するのは、夏の夜更けにかがり火の周りで、笛と太鼓の音にあわせて踊る昔の素朴な人々の姿であり、婚礼の踊りを踊る一組の男女の様子である。皆「はるか昔に 地の下で麦の肥やしになっている者たち」(those long since under earth/Nourishing the corn)であり、創世記の「塵であり、塵に返る」人間の姿である。かれらの踊りのリズムが、当時の生活のリズムとなり、季節や農作業の「時」と呼応する。人々が踊る時の「上がる足、下がる足。食ったり、飲んだり。糞する、死ぬる」(Feet rising and falling./Eating and drinking. Dung and death)。

第Ⅱ部は、まず17行の定型詩の形式で、季節や宇宙の秩序の混乱が歌われる。時は一年の「終わり」の11月の末なのに、植物などは「初め」の季節の春や盛夏の様相を見せ、その混乱は雷鳴とともに宇宙に反映される。星は星座を構成して、天は「サソリ」座が太陽と戦い、彗星や獅子座の流星の火が渦を巻いて、「世界を、氷河の嶺の支配の前に先立つ、燃える破滅の火にさそう」(shall bring/The world

to that destructive fire/Which burns before the ice-cap reigns).

Eliot は次に、詩作に携わる者としての、言葉と詩の技法との長年の苦闘を思い、「詩などはどうでもよい」(The poetry does not matter)と述べる。長らく求めていたものは、むしろ心の平安であり、それもいわゆる「年を重ねた者の落ち着き」とか「老人の知恵」などというものではない。内心の闇から目をそらし、表層的な経験のみから引き出した知恵には用がない。真の英知とは、「そのたびごとに新しい発見があり、知識や経験全体の図式が新たになるものである」(the pattern is new in every moment/And every moment is a new and shocking/Valuation of all we have been)。大切なのは自己を空しくして、神へ所属することであり、謙譲の知恵を持つことである。

The only wisdom we can hope to acquire  
Is the wisdom of humility: humility is endless.<sup>(4)</sup>

“Burnt Norton”の第Ⅲ部の115-117行にも、この内なる暗闇 (internal darkness)と常なる孤独の世界 (the perpetual world of solitude)が出てくるが、この個所と同じく、魂の復活のために必ず通るべき関門であり、そこで謙譲の知恵をもって待っていれば、最終的な啓示が得られる一つの状況である。

“East Coker”の第Ⅲ部では、この暗闇を死との類似性をもって描くところから始まる。「ああ暗い暗い暗い。みんな暗闇に突込んで行く」(O dark dark dark. They all go into the dark)。あらゆる者達がみんな暗闇に落ちてゆくが、この「生きながらの死」には、誰も埋葬はされない。心の空虚さ、孤独、自己の存在が無になるという恐怖などをもって生きている状態であり、キリスト教の三つの原理である「信仰、愛、希望」を得るには、ただ心を空しくして、その闇の中で待っている必要がある。恩寵とは与えられるものだからである。徹底的な自己否定と、いわゆる神秘主義者の説く「消極による道」のみが、闇の中に光を見だし、真実に至る方法である。スペインの神秘思想家 St. John of the Cross (1542-91) が、*The Ascent of Mount Carmel*の第13章の中で述べた思想を、Eliot は翻案していく。

In order to arrive at what you do not know  
You must go by a way which is the way of ignorance.  
In order to possess what you do not possess  
You must go by the way of dispossession.  
In order to arrive at what you are not  
You must go through the way in which you are not.  
And what you do not know is the only thing you know  
And what you own is what you do not own  
And where you are is where you are not.<sup>(5)</sup>

「無知によって知らぬものへ至り、持つことを断念して新たに持つことができ、自己を変えるためには自己を空しくする必要がある」のである。

Eliot によれば、“East Coker”は1940年の「聖金曜日」(Good Friday)を記念して書かれた。Good Friday は復活祭の直前の金曜日で、キリストの十字架での受難を忍ぶ祭日である。第Ⅳ部は、内なる

闇を抱えた人間を病人に、そして十字架上のキリストを外科医にたとえて、我々が受けるべき治療について述べられている。「傷付いた外科医」(the wounded surgeon)であるキリストが、メスで我々の魂の病の患部を探る。十字架にかけられたために「血を流す手」が、癒し手の技の鋭さと憐憫をもって、発熱の原因を見いだす。教会はここで、「瀕死の看護婦」(the dying nurse)に例えられる。その役割は「我々の唯一の健康とは病」の状態なのであり、神に背いたために樂園を追放されたアダムの呪いを、我々に思い起こさせることである。そして、「回復のためには、病気が重くならねばならぬ」(to be restored, our sickness must grow worse)し、「地球全体が病氣なのである」(The whole earth is our hospital).

The chill ascends from feet to knees,  
The fever sings in mental wires.  
If to be warmed, then I must freeze  
And quake in frigid purgatorial fires  
Of which the flame is roses, and the smoke is briars.<sup>6)</sup>

冷えが足元から膝まで昇り、熱が脳髓の、鉄線のような神経の中で広がっていく。霊的救済のためには「ふるえて氷のような浄罪の火に焼かれねばならず」、その炎は薔薇の花卉の形であるとともに、薔薇が象徴する愛の影を宿す。目に沁みる煙は、その薔薇の刺のように心に突き刺さる。

人間は普通、中年期を迎えると、多少青年期の感受性を残している人ならば、必ず自己の越し方を顧みて、ある恐ろしいまでの迷いを持つものである。つまり、「自分の人生は、もしかすると失敗ではなかったか、もっとより良い人生があったのではないか」という、取り返しのつかない焦燥感にかられるのである。Eliotの場合もそうであった。“East Coker”の第V部において、彼は50の齢を迎えて、この心が凍り付くような思いをありのままに述べる。「こうしてはくは、人生の道半ば。言葉の用い方を知ることにより費やした二十年——あらかたは無駄に過ごした、二大大戦間の歲月」(So here I am, in the middle way, having had twenty years—/Twenty years largely wasted, the years of *l'entre deux guerres*). Eliotが、この20年間 *The Waste Land* (1922)や *Ash-Wednesday* (1930)を始めとする詩を約30篇、評論を約50篇ほど書いていることからすれば、けっして無駄に過ごしていたわけではない。銀行やFaber社に勤めながら、精力的に読み、創作してきたのである。

詩人にとって、「言葉と表現」の問題は、イメージ表出という観点からすれば、「内容」を越える重要さをもつものである。“East Coker”に先立つ“Burnt Norton”の第V部においても、言葉の使用についての詩人の慨嘆が述べられている。事情に合わない不正確な用いられ方をされると、「言葉ははりつめ、ひびが入り、折れてしまう」(Words strain, / Crack, and sometimes break). まるで重荷をかけられたように、上滑りしたあげく、生命を失い、朽ち果てるのである。“East Coker”においても、ようやく内容に合う言葉を見つけたと思ったら、内容の方が違う意味を持つようになっていたり、新しい言葉が市民権を持つには時間がかかったりするので、新旧の言葉を組み合わせたりするが、それもすぐ陳腐になってしまうという、詩人の嘆きが語られる。「一つ一つの試みが全くの新しいスタート、しかもそれぞれに異なる失敗」(every attempt / is a wholly new start, and a different kind of failure)であった。しかし、詩人は新たに決意する。「我々の道は、試みることだけ。あとはあずかり知らぬこと」(For us, there is only the trying. The rest is not our business)と。1927年に、父祖の国イギリスに帰化して十余年、

すでにイギリス文壇に揺るぎない地位を築いていた Eliot にとっても、なお詩作と信仰の道は厳しく、絶えず自己研讀と自己否定を迫るものであり、一生の課題であったのである。

East Coker の小さな村に立って、自己の半生を振り返るとともに、遙か昔に祖先が理想の地を求め命をかけて大西洋を渡っていったことを思う時、Eliot が決意したのは新たな出発であった。

Home is where one starts from. As we grow older  
The World becomes stranger, the pattern more complicated  
Of dead and living.<sup>(7)</sup>

「家はそこから出かける所」であり、人が年を重ねるにつれて、過去と現在、死んだ者と生きている者への思いが交錯して、世界はますます理解しがたく、複雑な様相を帯びてくる。とりわけ、死者と生者が織り成す図柄は複雑で、生きている者の意識の中に死んだ者の一生の影が伝統などの形をとって入り込み、生きている者の生き方をも左右するほどになる。人間そのものへの理解と愛は、時間と空間に無関係になった時に初めて深まる。「愛が最も愛自体に近くなるのはここも今も問題でなくなる時だ」(Love is most nearly itself /When here and now cease to matter)。

Old man ought to be explorers  
Here and there does not matter  
We must be still and still moving  
Into another intensity  
For a further union, a deeper communion<sup>(8)</sup>

「年を重ねてきた者は、なおも探求者でなければならぬ」。それまでの自己に満足することなく、今までの伝統に加えるべき新たな可能性を求めていかなければならない。時空を越えたものを求めて、さらにキリストが啓示したものを体現すべく、愛と信仰と希望の人生を目指すことこそ、Eliot がこの詩篇で示した結論であった。

#### IV. “Little Gidding”

ヨーロッパの小さな村には、その地域にふさわしい素朴で鄙びた、小規模の教会が残っている。都市部に建てられたベネディクト派の壮麗な大聖堂とは異なり、昔から庶民の祈りの声その石の壁に反響して聞かれた場所である。イギリスの Huntingdonshire にある小さな Little Gidding の教会もそうである。この Little Gidding には、1625年に Nicholas Ferrar (1592-1637) が中心となって始めたイギリス国教会の生活集団があった。自給自足のつましい、敬虔な信仰生活の中心は「祈り」であった。1646年に、Cromwell が解散を命じて、このグループの活動は幕を閉じたが、当時の詩人達の George Herbert や Richard Crashaw, また、清教徒革命によって処刑された国王 Charles I もこの場所を訪れた。当時の面影がうかがえるのは唯一残っている教会のみであるが、17世紀の詩人達や国教会の状況を学ぶ現代の研究者や観光客のためにすぐ近くに資料館があり、East Coker の教会と異なって、来る人も多い。<sup>(9)</sup>

Eliot が Little Gidding を訪れたのは、1936年5月の末のことで、Charles I の最後の訪問について友人の George Every が書いた詩劇を読んで、興味を持ったからであった。“Little Gidding” で描かれる季節は冬、中心となるイメージは「火」である。第 I 部では、真冬の Little Gidding に永遠の春を幻視して、「木の枝や炭火の燃え立つ光よりもはるかにきつい輝きに、もの言わぬ魂は揺り動かされる」(And Glow more in intense than blaze of branch, or brazier, /Stirs the dumb spirit). 火のイメージは、引き続き宗教的な文脈に移っていく。「風は立たず ペンテコステの火が一年のこの暗い時に燃えている」(no wind, but pentecostal fire /In the dark time of the year). ペンテコステ (聖霊降誕祭) は 6 月上旬頃にあたり、使徒行伝によれば、舌のような火が降りてきて、使徒達を聖霊で充たし、異言を語らせたという記録がある。そして、この地にいつ来ても、どこから来ても、その真の目的は「祈るために膝まずく」ことである。

You are here to kneel  
Where prayer has been valid. And prayer is more  
Than an order of words, the conscious occupation  
Of the praying mind, or the sound of the voice praying.  
And what the dead had no speech for, when living,  
They can tell you, being dead: the communication  
Of the dead is tongued with fire beyond the language of the living.<sup>(9)</sup>

この場所で、祈りを通じて、生きている人間は死者との共感を得ることができる。死者達も生前、悟ることができなかつた真実を、死んでしまった今、靈感でもって伝えることができるのである。

第 II 部は四大元素の変化や、ドイツ空軍による夜明けのロンドン爆撃のあと、詩人が亡き師の亡霊に会って、その語る言葉を聞いたりすることが述べられる。“Little Gidding” のテーマの一つは「死」であるが、第 II 部の冒頭では、大気、土、水、火の死が語られる。情熱を傾けて一生を生きぬいた人間も、美しい薔薇も命を終えて燃やされ、一握りの灰になる。万物は塵から生まれ、塵に戻る。人間達の希望と絶望は形を残さないものであるがために、空気にたとえられ、「大気の死」となる。次に、海で遭難した人間の遺体が海岸に打ち上げられると、水で膨れ上がっているか、カラカラに乾いているかのいずれかであると述べられ、それは「死んだ水と死んだ砂」であるとされる。万物流転というヘラクレイトスの法則からすれば、水の凝固したのが土であり、死骸も土となる。これが「土の死」である。そして、人間が生きている間、所有していた物、例えば「都市や、牧場、雑草」などもやがて、洪水や火災が襲い、人間の労苦をだいなしにしてしまう。聖所や聖歌隊席も崩れ放題で、宗教的伝統は失われてしまっている。これが「水と火の死」とされる。全てのものが死に絶えるという終末論の状況である。

しかし、終末の思想はきたるべき再生と復活を前提としている。生きている者は、現世での些細なことに心を砕くことが多く、その精神的な疲弊のため、新たな出発を踏み出せないのが常である。再生への一步は、徹底的な自己否定や突然の啓示などによらねばならない。Eliot も、死者が語る言葉により、キリスト者が必要としているのは「浄めの火」であることを認識する。ドイツの空軍機がロンドンを爆撃して、「黒鳩」のように空遠く去っていったから、夜明けの舗道をさまよう詩人の前に、今は亡き師の亡霊が現れる。文学上の師であり、「一人であって、しかも大勢一緒になった顔」といえば、Eliot が



文体や技法の点でお手本とした Dante をはじめとする文人達をまとめていったものであるが、W. B. Yeats がそのモデルとされている<sup>90</sup>。語り手が亡霊と出会って話し合い、死後の運命を亡霊が述べるという技法は、まさしく Dante が使った方法である。亡き師は詩人にまず、二人の間で共通の関心であった文学上の理論や技法についてはそれぞれ時代の状況に左右されるものだから、時代が変わるとそれらも変わると述べる。つまり、「去る年の言葉は去る年の言語のもの 来る年の言葉は異なる声を待つ」(For Last year's words belong to last year's language / And new year's words await another voice) のである。しかし、

Since our concern was speech, and speech impelled us  
To Purify the dialect of the tribe  
And urge the mind to aftersight and foresight,<sup>91</sup>

「我々の共通の関心は言語だったし、その言葉ゆえにぼくらは民族の方言を純化し、さらに見直しと見直しとに気を配らなければならなかった」と、師は回顧して言う。死者の言葉は、さらに老境の時のありさまと死んで初めて悟った事柄を伝えている。魂が身体から離れる時、冷たい感覚の摩擦のみがあったこと、人生という苦い果実の味気無さ、人間の愚行に対して怒る空しさ、そして独善が他人に及ぼす害などの認識のあとでは「回復はかの浄めの火を待つよりほかにない」のである。この火とは煉獄の浄罪のための火である。

それでは、現世にあって、「生きながらの死」を克服し、精神的復活を可能にするのは何か。自己と物と人への愛着、自己から物から人からの超脱、そしてその中間にある無関心が人間の生の中にあり、焦燥と虚無感が心を荒廃させる。第Ⅲ部では、人生のこの負の側面に対する Eliot の出す処方箋を見ることができる。過去を思い出させ、昔の経験に当時には気付かなかった意味を新たに見出す「記憶」と「愛」の効用である。新たな意義付けをされた過去は、人に未来への展望を持たせ、愛は愛着と欲望を越えて、より高い次元に広がる図式——個人の狭い枠を越えた普遍的な人生観や世界観を生まれさせる。生きていく人間の「罪はまぬがれ難きものなれど すべてはやがてよし あらゆるものはすべてよし」。Eliot はこの祈りの地である Little Gidding の教会において、死者の語る声を聞き、「死によって完成される象徴」を理解する。つまり、この世にあって勝った者も負けた者も、死んだ後は「死者」として、一律に安らかに眠っており、最後の審判の日を待っていることをである。

第Ⅳ部では、この詩篇における象徴である「火」についての黙想が展開される。“Little Gidding” が書かれた1942年はまだ戦争中であり、戦火による破壊が日々見られた時代である。戦闘機が飛来し、まるで白鳩のように飛んでいく。ここで、戦火はペンテコステの火、つまり炎の舌に重なり、罪と過ちからの解放をもイメージする。火は次に、全く正反対の二重の意味を持たされて作用する。つまり、自己を過信し、欲望の炎となる火、そして、自我を焼きつくして、贖われるための火である。前者は地獄の火、後者は浄罪の火でもある。神は、人間の罪を贖う火という「人の力では脱ぐことができない炎の衣」を、人間に対する「愛」のもとに織ったのであり、人間の苦悩と悔恨、そして再生への道の耐え難い辛苦が火のイメージで示されている。

*Four Quartets* のフィナーレである第Ⅴ部は、今まで提示された理念とテーマがもう一度繰り返されて、各詩篇でのイメージの変奏も新たな局面で固定される。“Burnt Norton” や “The Dry Salvages”, そして、

特に“East Coker”の各行の下で、通奏低音として聞かれた「初めと終わり」の様相、「言葉と文体」の調和、「死と復活」についてのキリスト教的概念が、再度、同じ文脈で統括される。

What we call the beginning is often the end  
And to make an end is to make a beginning.  
The end is where we start from. And every phrase  
And sentence that is right (where every word is at home,  
Taking its place to support the others,  
-----)  
Every phrase and every sentence is an end and a beginning.  
Every poem an epitaph.<sup>13</sup>

過去、現在、未来の三つの時、及び「初めと終わり」の区分は、各々が相互に関連し呼応するためになくなる。そして、古い言葉の持つ伝統的奥行きと意味の広がり、新しい言葉が示す時代の息吹と斬新さが調和して、初めて打ち出される美の表出としての詩ができあがる。詩人は、絶えざる試行錯誤の後に、詩を完成させるが、それは一つの「終わり」であり、新しい詩作への「始まり」の時である。それ故、「あらゆる詩は墓碑銘である」。

また、死を免れ得ない人間のあらゆる行為は、次代の人間に伝承されて、伝統として生かされていく。

We die with the dying;  
See, they depart, and we go with them.  
We are born with the dead:  
See, they return, and bring us with them.<sup>14</sup>

「我々は死にゆく者と共に死ぬ」が、死者の残した精神的遺産を糧に生まれ変わる。「我々は死者と共に生まれる」のである。だから、「時」、つまり、「歴史」の浅い国の人々は、このような時による贖いを得ることができない。Eliotが、アメリカ人として生まれながらも、父祖の地イギリスに帰化した動機の一つがこの点にあった。彼は、ここ冬のイギリスで、人里離れた小さな礼拝堂にいて、過去の歴史と死者が与えてくれる「再生」の至福の時を過ごす。

So, while the light fails  
On winter's afternoon, in a secluded chapel  
History is now and England.<sup>15</sup>

信仰によって実感できた神の「愛」と、詩人として与えられた「使命」に導かれて、詩人は新たな出発点に立っていることを理解し、探求への道を歩み始めるのである。

We shall not cease from exploration

And the end of all our exploring  
Will be to arrive where we started  
And know the place for the first time.<sup>(16)</sup>

“Burnt Norton”において「記憶の中の戸口」を通ると、薔薇園に出た。“The Dry Salvages”の「褐色の神」であるミシシッピー川の源にも、小さな滝の音がしているだろう。そして、林檎の木には子供達の姿が見え、海の二つの波の間にある静止点でも、永遠の現在を意味する「ここだ、今だ、いつもだ」(here, now, always—)という声が聞こえる。“Little Gidding”は、Lady Juliana of Norwichの言葉と、火と薔薇が一つになるイメージで終わる。

And all shall be well and  
All manner of thing shall be well  
When the tongues of flame are in-folded  
Into the crowned knot of fire  
And the fire and the rose are one.<sup>(17)</sup>

炎となった霊的言葉が示す真理と、神の愛を表す薔薇が一つに重なり、詩人は魂の救済を確信するに至るのである。

以上、*Four Quartets*の二つの詩篇の内容について、死と復活のテーマの系譜と展開をたどった。アメリカのプロテスタントの家系に生まれ、後にイギリス国教会に帰依したEliotではあるが、彼の宗教観と人間観には謹厳なピューリタンの横顔が浮かび上がる。“East Coker”では、「初めと終わり」が緊張関係を保ち、この世での徹底的な自己否定と神による救済が強調され、老年に円熟を見るのではなく求道者の姿を求める。“Little Gidding”でも、全ての物を焼き尽くす戦火と救済の炎が重なり、Eliotは、自己の過去の詩作品にたいして「あらゆる詩は墓碑銘である」として、絶えざる精進を決意する。また援用される過去の神秘主義者達の言葉からは、精神的復活へのみちのりは遠く、謙虚さのみが必要とされることがうかがわれる。彼の主張からは、神の恩寵を素朴に拝受した聖フランチェスコよりも、砂漠で禁欲生活を送った聖アントニウスの姿が彷彿としてくるのである。これは、読者の心情を代弁するというより、作者の主観をいかに言葉の芸術として昇華させるかに重点を置く現代詩が陥っている状況にも似ている。詩人Eliotも、このことをよく理解していた。彼にとって、*Four Quartets*は詩人として最高の、従って最後の作品であった。以後、Eliotの文学的試みは、人々との共感を求める詩劇へと移っていったのである。

## Notes

(1) キリスト教については、以下の参考文献を使用した。

日本基督教協議会文書事業部キリスト教大事典編集委員会編『キリスト教大事典』(改訂新版)、教文館、1991。

旧約・新約聖書大事典編集委員会編『旧約・新約聖書大事典』、教文館、1989。

荒井章三編『カラー版聖書大事典』, 新教出版社, 1991.

- (2) T. S. Eliot, *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot* (London: Faber & Faber, 1969), P. 171.
- (3) 1989年8月の午後, 筆者が East Coker のこの教会を訪れた時も, 誰もおらず, 近くの管理人に入り口を開けてもらって中に入ることができた. Eliot の骨灰と記念プレートは, 教会の南西部分に埋め込まれている. 教会の周囲には, この詩に描かれているものとあまり変わらないような田舎の風景がひろがっていた.
- (4) T. S. Eliot, *op. cit.*, P. 179.
- (5) *Ibid.*, P. 181.
- (6) *loc. cit.*
- (7) *Ibid.*, P. 182.
- (8) *Ibid.*, PP. 182-183.
- (9) East Coker を訪れた同じ時期に, Little Gidding の教会にも行く機会があったが, こちらは資料館にも何人もの人が来ており, 展示されている様々な資料に見入っていた. 木立ちの中に建てられた教会は East Coker の教会よりも小さかったが, 17世紀当時の人々の敬虔さが偲ばれるたたずまいであった.
- (10) T. S. Eliot, *op. cit.*, P. 192.
- (11) H. Gardner, *The Composition of Four Quartets* (London: Faber, 1978), P. 65.
- (12) T. S. Eliot, *op. cit.*, P. 194.
- (13) *Ibid.*, P. 197.
- (14) *loc. cit.*
- (15) *loc. cit.*
- (16) *loc. cit.*
- (17) *Ibid.*, P. 198.